ISSN 0914—6768

図書館だより

第 43 号

平成7年12月27日

愛媛大学附属図書館

目　次

電子図書館システムの動向と課題……1
私のすすめる一冊……2
平成7年度大学図書館職員長期研修レポート
－図書館の役割と電子図書館構想－……3
平成7年度漢籍整理長期研修をおえて……4
新聞記事に思いを馳せて……4～5
人体解剖CD－ROMについて……5
館長再任，医学部分館長交替……5
附属図書館セミナー開催……5
学術講演会を開催……5
自己紹介……6
図書館日誌他……6

電子図書館システムの動向と課題

済　賀　宣　昭

図書館の概念を類型で分けると，紙とカードを利用する紙メディア図書館，70年代以降のコンピュータ技術を利用した機械化図書館，近未来の電子図書館の3つになる。出版メディアの変遷という観点からは，原稿の電子化(紙)から出版の電子化(FDやCD－ROM)，出版のネットワーク化(ハイパーテキスト)へと変化してきた。

最近は，インターネットとマルチメディア技術により，にわかに電子図書館が現実味を帯びてきた。　ネットワーク上の電子的情報は，種々の物理的な制約を超えることにより，時間と距離を選ばない，同時に複数人が利用可能，情報の複製や加工が容易，保管に場所をとらない，多様な利用可能性などを特徴とする。図書館の機能は，一般に情報にインデックスを付与し，これを組織化して利用者に対して検索可能とすることにある。

電子図書館では，利用者自らネットワーク上で情報を探索し，レファレンスの単位も冊子体からテキストの構造を意識したものになる点が従来の図書館と大きく異なる。電子化により情報の生成から利用までの時間が短縮され，結果として情報の新しさ－鮮度も重要となる。ディジタル化された情報は新たに電子読書なる概念を生み，そのための支援機能，マルチウィンドウとハイパーメディア技術による資料参照機能，朗読，翻訳等のメディア変換機能などの種々の付加サービスも考えられる。また，情報発信の容易さから，著者と利用者(読者)との接近や一体化も起こる。

電子図書館における最も大きな課題は，情報の値付けと課金の問題である。これは著作権や複写権等知的所有権の問題とも関係し，電子図書館の成立を左右しかねない。また，ネットワーク上は無政府状態といえるような情報の洪水の中で，情報に対する一種の権威づけをどうするのかも重要な課題となる。この他に，電子図書館としての情報の収集範囲，利用者に対する安定的で効率的な情報探索の方法の提供，遡及データの入力問題，大容量記憶装置と適切なアクセスタイムの確保，情報プロフェッショナルとしての図書館員，出版社や学会等との関係等種々課題をかかえている。

(さいが　のぶあき　附属図書館事務部長)

第81回全国図書館大会('95.10.26)
第3分科会(大学図書館)にて発表

私のすすめる一冊

望月 佳重子

石牟礼道子著『十六夜橋』
径書房，1992年

人が人を一途に恋する力が，人が人を真の器量ゆえに敬う力が，制度を突き崩す。その力は女男，貧富，階級の差別を無化してゆく，と繊細優美な日本語が告げる。この小説は，巷に溢れる，打算と虚偽と惰性とから成る四流ロマンポルノ小説群への解毒剤。能の幽玄，ギリシャ悲劇の様式美，近松の情念，泉鏡花の夢幻を抱きとめ，さらに独自の，女性の語りを繰りひろげる。

時は，戦争の影さす大正時代。所は，今の水俣あたり。近代初期の田舎に，中世が，古代が，混在する。語りの主軸は，自家中毒で崩壊する家父長制。

妻に狂われ，妾に逃げられ，息子に死なれ，財を傾け，孤立する家父長は，しかし，おおらかで魅力的な当地の覇者。治水土木，建設運輸を請け負う豪族実業家である。その長が，村落共同体統合の象徴として，大きい石の鳥居などという，ろくでもない物を建てるころから，事態はよろず悪化する。本人の名誉欲と他人の賢い狡さとによって。

悲劇のただ中で，祖母・母・娘の三世代三人の女たちと，長崎に性的奴隷として売られる一人の女とは，強く気高い自我を貫き通す。四人には，下層階級の出身で女の仕事も得意な，優しくかっこいい男たちが，誠をつくす。女の苦海を我が海と思い定めて，共に生きる。とりわけ第三世代の綾と三之助が，うるわしい。その三之助も，やがて徴兵を免れないだろう。それでも女たちは，生命の糸を連綿と紡ぎ続けるだろう。

1969年，石牟礼は水俣病を主題に，傑作『苦海浄土』を書いた。これを読み返したら，本年の訴訟和解とわずかな慰謝料は，いかにも受難者に残酷で，患者よりも主犯のチッソ水俣工場とその縁者を救済するものだ，とつくづく思った。それらを受け入れざるを得ないほど，疲れ果て追い詰められた病者の苦海は，どれほど深いことだろう。

1992年，本書『十六夜橋』が『苦海浄土』の実に23年後に書かれた。その間，石牟礼は見事な随筆集・句集・実録集を多く出しつつ，患者に寄り添い闘う，優しく激しい運動家でもあり続けてきた。前作が，水銀の毒による自然と人命の収奪を描いているのに対して，前作と双璧をなす『十六夜橋』は，先にも述べたように，家制度の毒による人身と人心の搾取を描く。その毒とは，人間の身心の自由と尊厳を，家の中に囲い込み，剪定し整形しようとする，洗練された暴力。

それゆえ，志乃さま，咲さま，綾さま，秋人さま，樫人さま，と呼び合う，雅やかな旧家が孕む狂気の地獄と，貧困漁師の実家の借金のため小夜さんが売られる，最下層の女郎置家が隠さない地獄とは，同質なのだ。ただ，ここで石牟礼は，内部崩壊中の上層の家が獲得してきた美に，そしてそれが失われることに，哀惜と憐憫の情を，ほんの少しだけ，よけいに表していると思われてならない。

まあ，この思いは，私の個人的愛着と学問的情熱が，在日朝鮮韓国人のホルモンおばはん，アルコール兼ウラン中毒の先住民おっさん，在米カリブ海域出身の黒人ばあちゃん等々の方に偏っているせいかもしれない。まあ，とはいえ，しとやかで上品で，きれいな指で障子の切張りをする樫人さんなんかは，やはりまるきり私好み。そんないい男に限って，上層人は若死にする。

総じて，いい男たち像の品性と器量は，極貧の中で貴人の気位を保って生きた，と石牟礼が回想する，彼女の父上へのオマージュなのだろう。彼は，「盲目の狂女」であった彼の義母すなわち石牟礼の祖母を，警察の不敬者狩りと精神病者狩りから，命がけで庇い抜いたという。昭和6年，チッソ水俣工場にテンノスケが行幸あそばされた時，と随筆集『花をたてまつる』が記している。

（もちづき　かえこ　教養部英語教授）

平成７年度大学図書館職員長期研修レポート
－図書館の役割と電子図書館構想－

松 本 八 郎

今年も昨年同様の暑い夏であったが，まだ梅雨明け切れぬ７月10日から28日までの３週間に亘る標記長期研修に参加したので，研修から得た情報をもとに図書館の未来についてレポートする。

従来の図書館には図書や雑誌が印刷物として収集され，ある規制により書架や雑誌架に排列されている。利用者は目録カードやＯＰＡＣを利用して資料の所在を検索し、手にとって利用している。しかし，１冊の図書や雑誌は物理的に保管の為のスペースを必要とし，収集・保管・利用という図書館の役割の中ではサービス及び資料保管(保存)の為のスペースの確保ということが重要な部分であった。

こういった物理的資料の無限収集の限界の打破と，検索や利用の利便性から生まれたのが「電子図書館」構想であると思われる。

では,「電子図書館」とはどんなものなのかを，身近なところで説明したい。

本学でも既に行っているが，ＯＰＡＣ(Online Public Access Catalog)の様に端末等を利用し電子的通信手段を用いて情報を得る。また，最近特に注目されてきたInternetを利用し，WWW(World Wide Web)のサーバから様々な情報を入手する。本学ではまだ利用していないが，Online Journal(MosaicやNetscapeなどのブラウザを用いて雑誌の全文をオンラインで購読できる)やＣＤ－ＲＯＭなどの電子出版物を用いた情報検索。

以上の様なサービスは，既に実体験できる電子図書館機能の一部であるが，国内の一部の大学や欧米の主要大学では次の様なプロジェクトが進んでいる。

1)オンラインディジタルビデオライブラリー
2)地球・宇宙関係のマルチメディアディジタル図書館
3)環境情報のディジタル図書館
4)地図，写真のディジタル図書館
5)ネットワーク上の仮想図書館の技術開発

以上のことから総合し「電子図書館」というものを定義づけるとするならば，何らかの「物」の形態で流通している情報を，電子的な形態でしかも組織的に蓄積し，提供するシステムといえよう。

「電子図書館」化による恩恵は広範囲にわたり，さきに述べた資料保管スペースの問題解決，24時間の図書館サービス，地球資源の保全(特に森林資源)，環境問題などを例としてあげることができる。

こういった「電子図書館」機能を十分に発揮するためには，高速かつ大容量のネットワークが必要であり，だれでも気軽に利用できる環境の基盤整備が急務であろう。

極々近い将来，本学においても実現するであろう「電子図書館」では，多くの資料は電子化され,図書館から物理的形態を持った「図書」や「雑誌」は姿を消し，提供する情報(図書や雑誌の全文＋イメージ)は出版社或いは作者自身のWWWサーバで直接管理され，図書館の役割は著作権へのアクセス料(従来の図書や雑誌の購入代)の支払いと,どこのサーバにどのような情報があり，どうすれば利用できるか，といった「ネットワークナビゲータ」的なものが主になって行くだろう。

終りにあたり，研修中いろいろお世話になった図書館情報大学や各見学機関の皆様，熱心に講義していただいた講師の先生方，また忙しい中，あたたかく研修に送り出していただいた本学の皆様に心より感謝申し上げます。

(まつもと　はちろう　雑誌情報係長)

平成７年度漢籍整理長期研修をおえて

星 川 七 海

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターで行われた第16期漢籍整理長期研修に参加させていただきました。

７月３日から10月25日まで，間に７月12日から10月13日の自館での実習をはさむ長期の研修で，図書情報係の方には大変ご迷惑をおかけしましたが，無事修了証をいただくことができました。

日常業務では洋装本の漢籍や新学書の目録をとるのが精いっぱいで，整理しなければいけない綫装本の漢籍を横目に，目前の業務の多忙さで自分をごまかしておりましたが，今回の研修で得た知識と人のネットワークを支えに，できれば昭和59年以来発行されていない漢籍目録の刊行にこぎつけるよう，第14，15期の受講生とともに頑張りたいと思っております。

講義に実習に見学にと，南は沖縄から北は筑波まで，11名の，経験も知識もふぞろいの研修生達に我慢強く教えてくださいました講師の先生方や，東洋学文献センター職員の皆様に改めてお礼申し上げます。

ありがとうございました。

（ほしかわ　ななみ　図書情報係）

新聞記事に思いを馳せて

大 谷 トヨ子

ある日友人から「関東の某大学から古い新聞記事の複写依頼があったので，探してみるとあなたに関連する記事だったので」というメモと一緒に新聞記事のコピー２枚が届きました。この３月で定年退職する私にと友人がコピーしてくれたのです。当時これらの記事はスクラップしてあったと思いますが，ありがたく戴くことにしました。

１枚は，武智文庫に関する記事，もう１枚は漢籍目録が出来た時の記事でした。どちらにも若かりし時の私の姿が写真の中にあります。もう15年も昔のことです。

あの頃は現在のようにコンピュータを使用して図書の整理をという時代ではなく，すべて手作業で気の遠くなるような作業量でしたが，皆が一緒になって寸暇を惜しんで整理に当たったよき時代だったように思います。

長い図書館生活での大半を図書の整理に係わってきました。中でも新聞にも紹介された万葉集研究資料が中心の武智文庫，神道関係を中心に貴重図書にも指定された日次紀事や鈴鹿本大和物語を含む鈴鹿文庫等，特別文庫の整理には随分想い出深いものがあります。

また，昭和55年11月から56年１月までの間，東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターが開催した漢籍研修会の第一期生として参加する機会を与えられ，漢籍整理の世界にも首を突っ込むことになりました。そしてそれは私の図書館生活後半のライフワークにもなりました。たまに同級生に会うと「漢籍は変り者がするんだよ」と笑われていますが，４ヶ月の研修の仕上げは所属大学図書館の漢籍目録を作成することでした。

従来漢籍は和漢書と同様に整理されていましたので，その１冊１冊を丹念に調査し，貸出カード目録を頼りに研究室まで出かけて整理しました。平常業務の傍ら３年間を費やして，東洋学文献センター，研修生の仲間，図書館の同僚達の協力を得て出来上がったのが「愛媛大学附属図書館漢籍目録（漢籍所在調査報告３）東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編」です。そして東洋学文献センターの皆さんのご努力によって，１年後には「愛媛大学附属図書館漢籍目録書名人名索引」も出版されました。

新聞記事を見てつい昔の事を思い出してしまいました。過ぎてしまえばまるで苦労などなかったかのようにあの頃の事が懐かしく甦

ってきます。

図書館に勤めて三十有余年，その時々の出来事，また巡り会いそして去って行った人達への思いはつきません。長い間私を支え励まし，ご指導下さった方々大変ありがとうございました。

これからもますます魅力ある図書館の発展を担い続ける皆さんのご健闘を祈りつつ「サヨウナラ」を申し上げます。

（おおたに　とよこ

医学部分館資料情報係長）

人体解剖ＣＤ－ＲＯＭについて

医学部分館　情報サービス係

人体解剖ＣＤ－ＲＯＭ「Ａ．Ｄ．Ａ．Ｍ.」（アダム）（日本語版）を導入しました。

ＣＤ－ＲＯＭ「Ａ．Ｄ．Ａ．Ｍ．(Animated Dissection of Anatomy for Medicine)」は人体解剖画像（約２万枚）のほか組織の顕微鏡写真，Ｘ線写真，断層画像等が収録されています。

また，Ａ．Ｄ．Ａ．Ｍ．全身版のほか他の部位（足病学・整形外科－下肢部・産婦人科）についても検索できます。

検索は文字入力によってできますが，読みの頭文字でリストを表示することもできます。

機能としては，収録された解剖画像（拡大／縮小も可能）や部分名称，写真等を画面に表示し利用者が操作しながら学習する基本機能と，収録されている画像を加工したり，外部画像を取り込んでデータベース化する二つの機能に分かれています。一度お試しください。

高島館長再任

12月15日で任期満了となります附属図書館館長に高島庸一郎現附属図書館長が再任されることになりました。

医学部分館長交替

内海爽医学部分館長の任期満了に伴い12月16日付で植田規史教授（病理学第一）が新しく医学部分館長に就任されました。

附属図書館セミナー開催

図書館職員の意識向上と研修を目的として下記の要領で講演会が行われました。要旨を本号１頁に掲載しています。

日　時：平成７年10月18日㈬　14時～
場　所：附属図書館視聴覚室
テーマ：電子図書館システムの動向と課題
講　師：附属図書館事務部長　済賀　宣昭

学術講演会を開催

去る12月12日㈫に三重県立図書館長雨森弘行氏を講師にお迎えして，平成７年度学術講演会を開催しました。この講演会は愛媛地区大学図書館協議会の協賛により毎年行われているもので，今年のテーマは「開かれた図書館をめざして」でした。次号で要旨を紹介します。

自己紹介

井関 眞人
(情報管理課図書情報係)

平成7年1月に雑誌情報係に，そして4月より現在の図書情報係に異動となり，図書の受け入れに関する業務を担当しています。

学生時代は，卒論の作成時以外ほとんど図書館に立ち寄ることのなかった私ですが，社会人になって，桂冠詩人による“読書”についての明確な指針と出会い，それから図書館の存在を見直すことになりました。その一部を御紹介します。

「読書について言えば，“読む”ことも『心を耕すクワ』と言える。じつは，本そのものの中に，知恵や幸福があるわけではない。本来，それらは全部，自分の中にある。しかし読書というクワで，自分の心，頭脳，生命を耕してこそ，それらは芽を出し始める。“文化”すなわち『カルチャー(culture)』の語は，“耕す”すなわち『カルチベイト(cultivate)』からきていることは有名である。自分を耕し自分を豊かに変えていく。そこに文化の基本がある。あらゆる賢人が読書を勧めている。人生の“実りの秋”に大きな精神の果実をつけるために，今こそ，あらゆる良書に挑戦してほしい。」

これからも，この指針を自分なりにしっかりと受け止めて，図書館における日々の仕事に取り組んで行きたいと思っていますのでよろしくお願いします。

自己紹介

高市 智子
(医学部分館情報サービス係)

医学部分館情報サービス係(2F)のカウンターで，貸出・返却手続きや雑誌の配架などをしています。

数年前までは，学生として愛大の図書館を利用するという，今とは全く逆の立場でした。(といっても，テスト直前に勉強をしに行ったり、レポートのために本を借りたり，という程度で，利用していたというのも恥ずかしい位です。)その時は，まさか自分が図書館に勤めることになるとは考えてもいませんでした。

平成5年の9月から勤め始め，早いものでまる2年が経ちました。最初は，分からないことだらけで利用者の方々に声をかけられる度にびくびくしていましたが，最近は少しは慣れてきて，カウンターで毎日いろいろなことを経験し，楽しみながら仕事をしています。まだまだ，皆様にはご迷惑をおかけしていることと思いますが，これからも，頑張りますので，よろしくお願いします。

図書館日誌(会議，研修)

9月6日	第2回附属図書館電算システム仕様策定委員会
9月12日～14日	第36回中国四国地区大学図書館研究集会(岡山大学)
10月5日～6日	国立大学図書館協議会シンポジウム(大阪大学)
10月12日	平成7年度第4回医学部分館図書・情報委員会
10月12日～13日	国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議(高知医科大学)
10月18日	附属図書館セミナー
10月26日～27日	第31回日本医学図書館協会中国・四国部会総会(川崎医科大学)
10月31日	国立大学図書館協議会理事会(名古屋大学)

愛媛大学附属図書館報「図書館だより」第43号 1995年12月27日発行
編 集：館報編集委員会 発 行：愛媛大学附属図書館
〒790－77 松山市文京町3番 TEL(089)924-7111㈹